
seed &a boy

うわっほい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s e e d & a b o y

【Nコード】

N 6 3 3 8 Y

【作者名】

うわっほい

【あらすじ】

完全オリジナルファンタジーです。
あらすじはプロローグにて^^

種と少年、プロローグ

これは、ある一人の少年から始まる物語。

彼はアルファナ学園卒業生 ヴィリクレス・イトル 18歳

この勇者学園を卒業できた者はすぐに、人間の最大の敵といわれる「魔王」を討ち取りに行く。

そして「魔王」を討ち取った者には莫大な賞金と名誉が与えられることになっている。

つまり卒業生に与えられる選択は、負けて死か、勝って富豪か・・・その2択である。

だが、彼はそのどちらでもない運命を歩むことになる。

これは、ある一人の少年と「種」が世界を変える物語・・・

種と少年、プロローグ（後書き）

毎回あとがきで今回のおさらいを書いていきたいとおもいまふ。

1話「卒業」

「えー、ではこれにてアルファナ学園第37回、卒業式を終了する。卒業生は各自帰宅、明後日からに向けてよく休むように」

校長の声が響き渡り、卒業式は終了した。

今日からは「勇者学生」からホンモノの「勇者」になる。

明日のうちに魔王遠征隊のどこかに組まれ、明後日になればこの町からも、卒業する。

胸に、悲しさがこみ上げてくる。

（でも、魔王を倒して国から賞金をもらえば・・・！）

卒業生の内の一人、ヴィリクレス・イトルの目的は金だった。

それだけなら大半の卒業生と同じ目的だが、彼は富豪になりたいというわけではなかった。

彼の家には、両親がいなかった。

イトルが小さい頃、母親が最後の赤ん坊を生み、その後すぐ病氣にて他界。

父親は家族を残し、失踪してしまった。

残されたイトルとその妹となったアルル。

アルルは生まれるときの環境に問題があり、持病を持ってしまった。だがイトルが死ぬ気で働き、なんとか10年間を生き延びた。

しかしアルルの持病が悪化してしまい、国が運営する病院でなければ治せないほどになってしまった。

だがそれには、莫大な金が必要、そこでイトルの目に入ったのが「魔王討伐、賞金1億G、3年間の勇者学生期間の後、試験で合格した者のみ」

その張り紙だった。

すぐにアルルを親戚に預け、3年間アルファナ学園で勇者学生になった。

試験では見事全A評価で合格。賞金への道が一步開いたところだっ

た。

遠征隊に入るのは明後日。その前の1日だけ唯一の休みが与えられる。

だが、その日が彼の運命を大きく変えようとしていた。

1話「卒業」（後書き）

おさらい。

アルファナ学園卒業生イトルは、妹の病気を治すため莫大な金が必要なので魔王討伐を目指します。
そして舞台は遠征隊に入る前日・・・

2話「一日」

アルファナ学園卒業式から一日たったある日、世界に異変が起きようとしていた。

「魔王様」

「どうした？ガンター」

「この頃、人間界に生息する魔物が増えているようです。」

「何、我が作り出した魔物が結界を越えて逃げたのか」

「いえ、どうやら魔界から送られてきているようです。」

「魔界からだと！？ということは・・・」

「はい」

「聖戦が始まるうとしているのです」

「止めれるか？」

「手は打ってあります。あとは・・・」

「人間しだい・・・か」

イトルに与えられた、最後の自由の日だった。

明日からは魔王遠征隊に入り、戦うこと以外何もできなくなる。

まずは簡単に身支度を済ませ、アルルに会いに行った。

親戚の家に着くと、アルルはすでに寝たきりの状態になるまで病状が悪化していた。

（安心しろ、アルル。絶対に元気にしてやるからな）

そう心で誓い、イトルは親戚に別れを告げ、そのまま家を出て行った。

魔王遠征隊に明日までに合流するため、午前以内に町を出た。

運よく遠征隊は隣町いるらしいので、移動される前に合流したい。
少し遠いが、明日までには着くはずなのでゆっくり鼻歌を歌いながら歩いていった。

と、そのときだった。

「ちよつとその君」

呼び止められ後ろを振り向くと、一人の男が立っていた。

「卒業生ですよね？」

急に話しかけられびっくりしたが、とりあえずうなずいた。

「そうですか、私達は今、卒業生を対象に・・・」

「えつと、誰ですか？」

説明を途中で切らせ、質問した。

「ああ、失礼。私の名前はアクナーク。魔術専門の勉強をしているんだ。」

アクナークは続けた。

「卒業生である・・・」

「イトルです」

「ありがとう、卒業生であるイトル君にいくつか聞きたいことがあるんだ。」

どの道時間も余ってるし承諾した。

「えつとね・・・」

彼はポケットから何かの「種」を取り出した。

「これを手のひらに素手でもってもらえるかな？」

まったく意味がわからないが、言われたとおりに手に乗せた。

その瞬間、種がまぶしいほどの光を発した。

「光った・・・!？」

イトルが言うよりも早くアクナークの方が反応した。

「いました！見つけました！」

アクナークが急に耳に手を当て叫んだ。

「ああ！やっと520人目で見つけた！よかった！これで減給がなくなる！」

アクナークは嬉しさのあまり小躍りを始めた。

「えっと・・・」

「そうだった！イトル君！君には今から一緒に来てもらおうよ！」

「え！？なんで!？」

「君が選ばれたからに決まってるじゃないか！」

何に、と聞く前に体がふわっと浮いた感触がした。

「さあいこう！我らの・・・」

「魔王城へ！」

2話「一日」(後書き)

おさらい。

世界の異変、聖戦の予感。

謎の男、アクナークとであったイトルは「種」に選ばれ、アクナークに連れて行かれる。

3話「魔王様」

気がついたときには、広くて豪華な部屋にいた。

右を見ると、顔いっぱい笑顔を広げたアクナークがいた。

「さあ、イトル君！じゃなかった！イトル様！」

「は、はあ！？」

「ここが王室になります！続いて・・・」

また体がふわっと浮いた。

目を開けると今度はいいにおいのする場所に来た。

「ここが食堂になります！続いて・・・」

「ちょ、ちよっと！」

ふわっ

応接室、動力室、監視室、ホール・・・

「最後にここはマスタールームでございます！」

「待て！待て！」

やっとアクナークが動きを止めた。

「はい、どうしましたか？イトル様」

「状況がまったく理解できないんだよ！一体どこなんだここは！そもそもイトル様って・・・」

「そうでした！その説明が先でしたよね！実は・・・」

その時、後ろから新たな声がした。

「待て、アクナーク。ラフィー様が説明するから王室に送ってやれ」

アクナークは「わかりました」と魔法を唱えた。

また体がふわっと浮いた、何回やられても慣れない。

最初の王室に戻された。

最初に来た時は王座には誰もいなかったが、今は誰かが座っている。

でもなぜか魔王との最終決戦のようなプレッシャーがまったく感じられない。

「えっと、はじめて・・・いい？」

予想を上回る高い声だった。

（・・・女の子？）

手に、きつとセリフが書いてあるであろう紙を何枚も持っていた。

「ご、ごほん！お、愚かなる人間よ！よく我の元までたどりついたな！」

魔王の隣にいた骨でできた兵士がページを変えた。

「さあ、我と命をかけたファイナルバトルを・・・って！」

「これ違うじゃない！作ったの誰よ！だいたい我じゃなくて私だし！」

違うのかよ、とと思っている間に骨の兵士が新しい紙を持ってきた。

仕切りなおし、である。

そこで何を聞いたのか、何がおきるのか、また何がおきたのか、気がついたら隣町の中心にいた。

町を出てから、ここに着くまでの記憶がまったくない。

よくわからないが、もう夜も近いので、宿を探すことにした。

魔王は、必ず倒す・・・アルルのために・・・

3 話「魔王様」(後書き)

おさらい。

魔王登場。

ちなみに2話目の冒頭の魔王とは別人なんですよ、1人称がね。も
しかしたら重要な情報かも。

そしてイトルは今日の記憶を無くしてしまう。

いったい彼は魔王から何を聞いたのだろうか・・・

1章最終話「3ヶ月」

この魔王遠征隊に入ってから3ヶ月がたった。

初めの頃は、簡単な任務しかもらえなかったが、その内討伐など危険なこともやるようになった。

そして、国から一通の手紙が、遠征隊長に届いた。

「魔王を、倒せ」

148人いる部隊から、30人。その中にイトルも入ることができた。

事前の調査などにより、位置、周りの状況など、完全にわかっている。

負けることは無い。自信はあった。

あと少しで、アルルを救うことができる。

絶対に・・・

入隊前日のことは、今でも思い出せない。

誰かにあって、どこかにいて、いつの間にか帰ってきていた。

今まで生きてきた中で、一番不思議な出来事だと思う。

だが、一つだけ頭の中から離れない言葉がある。

それは・・・

明日は出発の日。

なにも迷うことなく魔王を倒せる。

そしてアルルは救われて皆ハッピーエンド。

だが、どうしてもそうなる気がしなかった。

1章最終話「3ヶ月」（後書き）

おさらい

1章の幕が閉じました。

入隊から3ヶ月、ついに魔王討伐の日。

イトルはアルルを救うことができるのか！

魔王（女の子）の目的とは！？

「種」の存在は！？

それぞれの運命が、一つになろうとしている・・・

番外「キャラ紹介」（前書き）

1章に登場したキャラクターを紹介しまふ

番外「キャラ紹介」

ヴィリクレス・イトル

本作の主人公。幼い頃から妹と二人暮らし。妹のアルルの持病が悪化し、莫大な賞金がもらえらという魔王討伐をしてアルルの病を治そうとする。アクナークとラフィーとあったことがあるがその日の記憶がなくなってしまう。

ヴィリクレス・アルル

イトルの妹。まだ紹介するほど、重要なことはないが後々大きく物語に関わる存在。

ルリスト・アクナーク

主人公と「種」を引き合わせた人物。魔王の配下で、隠しているが魔族である。

????・ラフィー

魔王。女の子。だが目的は世界を滅ぼすわけではなさそう。魔王なのに。

?????・?????

2話目の冒頭にでた魔王。ラフィーとは別人。重臣にガンターを持つ。

ゴノス・ガンター

上の魔王に使えている。まだ謎につつまれた存在。

番外「キャラ紹介」（後書き）

おさらい。

まだ多くの人物が謎に包まれている。

だが後々それぞれがつながっていくのだろう。
期待せざるを得ない。

5 話「記憶（前半）」（前書き）

少し長くなるので前半後半に分けました。

5話「記憶（前半）」

魔王城、監視室。

「ラフィー様、イトル様が入ってきましたよ。」

アクナークが横を見ると、ラフィーはお菓子を食べていた。

「王室で待つてなくていいんですか？」

アクナークはひょいっとお菓子の袋を一つとった。

「あ、こら！それ楽しみにしてたのに！」

アクナークはお菓子を食べながら、

「だーからー、イトル様が来ましたって」

「んー、特に問題はないでしょ？記憶消去は完全にはしてないし。」

「その記憶が戻った後、ですよ」

「あー・・・」

玄関ホールに30人の部隊が集まった。

「よし、ここからは各自自由、魔王を見つけたら戦闘はせず、私に知らせろ。」

おそらく、他人に魔王を見つけさせて自分の手柄にするつもりだ。

はい、と返事はしたものの、たぶんここにいる全員が報告をするつもりはないはず。

それにしても広い・・・迷子を覚悟で進んでいった。

20分後、

王座に一番乗りした。

運がよかったのか、直感だけでここまでくることができた。

だが王座には誰もおらず、ただ薄暗い雰囲気だけが感じられた。

（・・・？）

突然頭に何かの映像が流れる。

（王座・・・下・・・階段・・・！？）

気がつけば、王座の下にある隠し階段を下りていた。
一番下まで行くと、ドアがあった。だが、いくら力をこめても開く
ことができない。

その時、上のほうで声がした。

「おい！こんなところに隠し階段があるぞ！」

「何、どうやら先に行ったやつがいるようだな」

「大丈夫だ、そいつが魔王を倒した後、俺たちでそいつをやっちな
えば・・・」

「手柄はこつちのもん・・・か」

足音が近づいてくる。

おそらく相手は二人、この狭い場所ではかなり不利である。

「くそつ、開け、開け！」

ドアを引いても押しても、ビクとも動かない。

絶体絶命。

その時、また頭の中に、映像が送り込まれてきた。

5話「記憶（前半）」（後書き）

おさらい。

3ヶ月が過ぎ、遠征隊は魔王を討伐しに魔王城にやってきた。

その内のイトルは、偶然か、一番に王座に乗り込んだが、そこには誰もいない。

だが隠し階段を発見。一番下までおりると、そこにはドアがあった。だがあけることができない。また後ろからは別の遠征隊員の足音が聞こえる。

彼らは手柄を横取りしようと企んでいた。

絶体絶命のピンチ。そのとき・・・！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6338y/>

seed & a boy

2011年11月21日17時21分発行